

名古屋大学文書資料室と坂田記念史料室に堀川直顕名大名誉教授による面白い文書2件が見つかったので紹介する。早川幸男先生は正に快男児と言える人だったようだ。

2021年3月26日 岡本祐幸

## 1969年名古屋大学紛争の記録

[堀川直顕(名古屋大学名誉教授)記す]  
(当時、名古屋大学理学部物理学科助手理学部職員組合書記長)

1969年、名古屋大学において大学紛争が勃発した。1960年代後半に政府が成立させた「大学法」が、大学の自治すなわち「管理・運営に教授会・評議会が責任を持つ」体制に文部省が介入出来ることにつながる、として全国の大学で紛争がわき起こった。この大学紛争は、当時中国で発生した「文化大革命」の影響を受け、「造反有理」の名のもと暴力的に振る舞う学生と大学の管理・運営に責任をもつ評議会・教授会との対立の様相を呈した。

東京や関西（特に京都）での過激な学生による大学当局にたいする攻撃は、時に、新左翼といわれる複数の集団（セクト）間の権力闘争を含み、且つ、一大学の紛争に、他大学の同じセクトからの応援が入ったりして極めて複雑な紛争となった。

この紛争を終結させるために、大学は如何に振る舞うか、も問われた。すなわち、ヘルメットをかぶり、ゲバ棒を振り回して職員や一般学生に殴りかかる暴力集団化した学生（これら学生を暴力学生と呼んでいた）を説得して鎮めることは不可能である。しかし、大学は「自治」の名の下に警察権力に頼る解決には抵抗がある。名古屋大学では、関東・関西での紛争の真似事のように1年遅れ位に紛争が発生したが、警察の力を借りずに解決しようとしてほぼ半年の時間を浪費した。1969年5月23日、教養部をバリケード封鎖した教養部ストライキ実行委員会（Cスト実）はその後5月28日には本部庁舎も占拠・封鎖した。本部職員は、持ち出せるだけの資料をもって、山手通り西の工学部敷地「中央食堂」（現在、建て替えのため取り壊されている）となっている建物に移動して事務を執らざるを得なかった。

占拠されている間に本部庁舎内部にあった資料や文献は破棄されたり、盗まれたりしており、壁や扉には無数の汚い落書きがなされ、荒れ放題となった。名古屋大学での「Cスト実」等の学生の要求は、名古屋大学の運営に関して評議会が決定し発表した声明「4.28 声明・見解」の白紙撤回であった。この声明が「大学運営の自主規制」であるから撤回せよ、というのが主張である。4.28 声明の骨子は以下の様なものである。

1. 今日の大学問題の主要な原因は文教政策の貧困の累積である。
2. 大学正常化に関する文部事務次官通達は「治安」の観点だけからとらえ、「秩序の維持」を理由に警察当局が認めた場合には大学構内で必要な措置を執ることが出来る、としている。評議会は大学を警察の監視下におく事は学問・思想の自由を根底から覆すことになるから「通達」に反対である。
3. 大学紛争から「秩序の回復」を理由に「臨時立法」を国会で可決することに反対。
4. 学生は大学の能動的構成員で、従来から自治活動を尊重して来た。学生の総意の表明は民主的に選出された代表を通して行われるべきである。
5. もし、一部の学生が要求の主張に当たって暴力的方法に訴えるならば、その行為は自治の原則の侵害、大学自治の内部からの切り崩し、全構成員による問題解決の妨げ、大学への政府の干渉を促進することになる、との理由で容認出来ない。

「Cスト実」や、学部で作られた「理共闘」などの組織は、4.28 声明の「白紙撤回」を闘争目標に建物封鎖とゲバ棒による暴力行為を繰り返したが、結局は上記5. の「暴力的方法を許さない」という大学当局の姿勢に対する反逆闘争であった。

「大学紛争」に名を借りた「革命ごっこ」をしていただけというのは、封鎖された本部庁舎内の荒れ様、そこに書かれていた落書きの内容(その写真の多くは大学の文書資料室に収めた)が如実に物語っている。澄んだ理性と論理に基づく「大学の民主化」などとは全くの別物である。退廃的落書き、庁舎内の書籍の大量紛失、大学運営に欠かせない資料の破損。この様な蛮行に対しても、「学生のエネルギーが素晴らしい」とか、「古い管理体制の打破が必要だ」との立場を表明する教官もいた。暴力学生の理論的バックボーンとなっていたであろう。

理学部は紛争の中で大学の正常化の先頭に立って行動した。職員組合は暴力学生が豊田講堂屋上に300Wの大型スピーカーを設置してアジテーションを繰り返すのに対抗して、理学部A館屋上に500W スピーカーを自作・設置して全学放送体制をとり、暴力学生による「建物封鎖」を未然に防ぎ、封鎖解除開始を告げるなど、全学職員・大学院生・学生の利益のため大きく貢献した。夜間では今池まで聞こえたということである。

6月16日評議会は本部封鎖事態の収拾策を検討し、「全学構成員の意向を十分反映させた形で封鎖学生との話し合いをする」との方針を決め、全学の意見を聞いた上で6月23日の評議会の検討の後、6月28日「Cスト実」学生との話し合いを7月2日に行うことを決定した。その内容は、日時：7月2日午後1時～5時まで、場所は：豊田講堂、議題は「4月28日声明・見解について、および、5月22日の説明書について」であった。7月2日の「話し合い」は午後2時過ぎから始まった<sup>1</sup>。これは「話し合い」というものではなく、正に「評議会団交」であり、議長は「Cスト実」が独占し、会場の学生・職員が彼らと異なる意見を言ったりすると、それを暴力的に封じ、発言者を豊田講堂の外に担ぎ出す、早川評議員が毅然と反対意見を述べると気が狂った様に会場から壇上に駆け上がり、ネクタイをもって締め上げる、といった乱暴狼藉の限りを尽くした。終了時間5時は守られず、深夜7月3日午前3時まで14時間も続いた。

上記の様な不正常的な状況が続いた後、ついに教養部建物の封鎖解除は12月22日午後3時過ぎ、理学部屋上の「ただ今から教養部封鎖を解除します」の呼びか

---

<sup>1</sup>当時、病気で理学部長を退任された坂田昌一先生に代わって、早川幸男先生が理学部長代理（および評議員）を務めていた。封鎖学生達との団交の日、理学部C館4階のエレベータの所で堀川が早川先生とばったり会ったら、「堀川君、これから豊田講堂に集団団交に行ってくる。君達は何かしてくれるか。」と言われたので、「だって、それは評議員会が決めたことで、私達は関係ありません。」と答えたら、「そうか、組合とはそんな冷たい所なのか。」と言って怒られた。

それで、当時闘争を収めるのに組合の活動の場としていたE研のコロキウム室へ行って、早川先生が言われたことを伝えたら、「それでは皆で応援に行こう。」ということになり、そこにいた20名ぐらいで一緒に豊田講堂に押し掛けた。そこは、千人以上の学生達で一杯だった。評議員をつるし上げる暴力学生達に「暴力はやめろ。」と皆で叫んだ。そうしたら、暴力学生達が怒り、沢田昭二先生などは、学生達に担がれて外に運び出されてしまった。我々の応援の声が届いたのか、早川先生も壇上で暴力学生達に厳しく応対された。

けに、約3千人の職員・大学院生・学生が集まり、教養部を取り囲んで始まった。封鎖学生達は屋上に集まり、屋上から敷石ブロック、石等を投下し、入り口付近ではゲバ棒で殴りかかるなどして、封鎖解除学生を攻撃した。解除学生達は卓球台、立て看板などを数人で頭上に担いで教養部玄関にたどり着き、バリケードを排除した後、封鎖を解除した。投下ブロックが卓球台を真二つに割り、頭部に深い傷を負う学生まででた。解除までにはほぼ10分くらいであった<sup>2</sup>。封鎖暴力学生達は狂ったようにゲバ棒等を振るいながら封鎖中の本部庁舎に逃げ込んだが、この教養部封鎖解除でおよそ60人の学生が負傷した。

翌12月23日、前日の学生負傷を理由に愛知県警は機動隊1300人を名大構内に入れた。名大開校以来初めてのことであった。機動隊が入ったことを察知した本部庁舎にいた封鎖学生はアツという間に遁走した。全国の大学では、機動隊がやって来た場合、何人かの暴力学生は抵抗し、機動隊と向き合ったことが報道されているが、名大の「Cスト実」、「全学闘」等の学生達は一人として機動隊にゲバ棒で立ち向かうものではなく、ゲバ棒は学内の無防備の職員・学生にのみ向けられたものであった。正に「革命ごっこ」のお遊びであった。この間、封鎖された本部、教養部等での仕事は全く出来ず、講義も進まず、学生にとっては無駄な青春の浪費、教官にとっては研究も教育も進まない暗黒の時期となった。

名古屋大学紛争の記録は、

「大学における民主主義運動」(名古屋大学職員組合連合会大学問題検討委員会第一委員会編)[解放新書35(汐文社)1970年12月1日発行]

にまとめられている。この記録の巻末の資料

D：教職員組合(p246)の項に挙げられている文書、

1. 理学部職組：「『Cスト実』等、一部学生の本部封鎖に反対し退去を要求する」

9. 理学部職組：「団結の力で封鎖を解除し、学園から暴力を一掃しよう！」

は、当時理学部職員組合書記長であった堀川による執筆である。

---

<sup>2</sup>堀川もその時ゲバ棒で後頭部を殴られムチウチ症が治るまで3年くらいかかった。

追記：

大学紛争が終結し、理学部にも平穏な日が戻った時、教授会で早川学部長が、組合代表で出席していた私（堀川）に、「理学部職員組合は正常化のため誠によく頑張った。組合として何か必要なものはないか。あれば、出来るだけ実現しよう。」と言われた。私は、「理学部の職員組合室、大学院自治会室、学生自治会室を作って欲しい。」と要望を述べた。その他に、これら3組織の合同会議室も要望した。早川学部長<sup>3</sup>は、程なく、プレハブで3自治会室を含む建物を作って下さった。さらに、合同会議室を並びに作ってくださった。合同会議室には大きなテーブルと称して、卓球台を入れ、この卓球台の入った会議室は、その後、30年余りにわたって理学部職員・院生・学生の憩いの場となり、職員組合は春・秋に卓球大会を催したりして理学部全員の親睦を図る場となった。

他学部の職員や学生もやってきたり、また、中国・韓国の留学生も交わり、いい国際交流の場ともなった。このプレハブの会議室（実質の卓球室）は2003年頃取り壊され、新たな理学部の建物が建てられた。卓球室はB館南側のプレハブに移ったが、使用者が減り、いつの間にか理学部事務の倉庫となってしまった。

---

<sup>3</sup> この名古屋大学紛争の收拾に向けては職員組合・院生・学生の活躍とともに、大学本部側としては、早川先生が評議員として暴力学生達に対して毅然とした態度を取られたことも大学全体の構成員に強い印象を与え、尊敬を集めた。そして、紛争の収束後すぐの頃に、荒れた大学を再生するよう早川先生に学長になってもらいたいという声が職員を含むあらゆる層から湧き上がった。しかし、50代前の早川先生は研究に専念したいからと固辞された。そして、早川学長が実現したのは、それから15年以上経ってからのことであった。

## 挿入写真

1969年12月22日午後、教養部封鎖解除のために集まった全学の学生・大学院生・職員。場所は現図書館が建つグリーンベルト。左上角で鉢巻をしている辺りが理学部職員組合員。赤丸が筆者（堀川）。



教養部封鎖解除に向かう学生たち。投下されるコンクリートブロックの防御用に卓球台を傘にして進む。



豊田講堂を占拠し、屋上に大型スピーカーを設置し、コンクリートブロックなどを集めていた封鎖学生たち。



封鎖解除に暴力的に対抗する封鎖学生たち。ヘルメット・ゲバ棒・覆面マスクが特徴。



教養部封鎖解除学生に屋上からコンクリートブロックを投げつける学生たち。



封鎖解除後の教養部建物付近。立て看板を盾に暴力学生の襲撃を防ぐ。



1994.10.7 夏

# 早川幸男先生追想録

平成6年9月

早川先生が亡くなられてはや2年が過ぎた。思い出はあまりに多く、「これを」と掘り出すこともむずかしいので若い頃の鮮明な2、3の記憶を記してみたい。

1. 私が先生と直接作業したのは修士2年の頃であった。当時、N研は新しい研究室をつくる、というのでたいへんな熱気だった。はじめての実験は東大原子核研究所での「陽子-ヘリウム散乱」であった。私と小早川氏は放電箱をつくり、サイクロで実験したが雑音ばかりで実現せず、SSD(半導体検出器)を購入した。当時の研究室予算の大半をはいた(26万円)ものだった。その実験中、今日のようにコンピューターがない時だけに、PHA(波高分析器)の打出し数値を手でグラフプロットした。この作業を徹夜で早川先生と行なうことになった。その日は何かと忙しい日で、早川先生も相当疲れておられた。当時東大の大学院生となっていた加藤貞幸氏が博士論文の内容説明に夕方7時過ぎくらいにこられた。説明は2時間位はあったと思うが、横で見ていると早川先生は半眠りで、時々目を開けておられた。しかし、突然鋭い質問が出て加藤さんも困った顔をしておられた。加藤さんが帰られた後、0時を過ぎた頃から実験は佳境にはいり、データがどんどん打出されてきて、えらく忙しくなった。私が読み手、早川先生がプロッターである。1時間近く作業をしていると何か変だ、と気付いた。プロット終わりの「ハイッ」の返事が、時々聞えない。そんなときは声を大きくして何度か読む。しばらく読み続けて、返事がないのでどうしようかと先生のグラフ用紙を覗いてみて驚いた。プロットした点が、横軸で途中から戻ってきているではないか。山の形をしたピークのはずが右側の腹をえぐられたようになっている。先生も、これはいかん、とばかりに消して書き直しをされたのだけれど、しばらくすると目の方が言うことを聞かなくなるようだった。結局は、先生には寝て頂くことになったが、私には「早川先生のような大先生でも睡魔には勝てんのだなあ」といった妙な安心感というか親近感というか、ホッとした感情がよぎったのを鮮明に憶えている。それまでの先生に対する評判、「鋭さ」「怖さ」、で見ていた観念から「先生も人だ」という親しみをもって接する事ができるようになった。先生が40才の頃である。

2. 大学紛争のさ中、早川先生は運悪く学部長事務取扱い、をされることになった。「全共闘」の名で大学本部が占拠されたり、理学部内でも「理共闘」が造反有理とばかり大騒ぎしていた。ある時、評議会は「全共闘」の団交に応じる返事をしてしまった。私は、当時理学部職員組合の書記長をしていた。団交に出席するため先生は4階でエレベーターに乗ろうとされ、エレベーターを待っていた私と酒井健二氏に「団交に出席するか？」と尋ねられた。私は「評議会在勝手に決めたのだから、組合は関係ないですよ」と答えた。その時、先生は「そうか。組合というのはそういう組織か！」とエライ見暮で怒られた。酒井氏と「早川さんは本気でサポートが欲しいのだな」と話しあい、すぐに組合員に連絡し、豊田講堂に押しかけた。「全共闘」の要求は「評議会の決定を白紙撤回せよ」というものだった。私たちは会場のあちこちから、やり方の不当性を野次った。当然、その声は早川先生の耳目にとまっただと思われる。野次を出していた沢田氏などは学生に豊田講堂の外に押出される位に殺気だっていた。壇上では、毅然として発言し、一步も退かない態度で対応していた先生に、業を煮やした学生が怒り、壇上にあがって先生のネクタイに手を掛けた。それにも臆せず正論を通した先生の姿に先生の真骨頂を見て感動し、一段と大声で学生の不当なやり方を攻めた。

先生には、組合の立場は立場だけれども、個々には「不法不当は許さないぞ」との気迫で理学部の職員が会場に入っていったこと、理学部職員は理学部を代表する早川評議員を支持するのだ、という意志を持っていることを理解していただけたのではなかろうか、と勝手に想像している。紛争決着後、今も理学部の職員・学生が愛用している卓球室（正式には、三者会議室）と自治会室のプレハブを理学部として作る事になった。早川先生と組合・自治会との信頼関係の結果生まれた「会議室」が理学部内の人々の交流と楽しみの場として今日まで残っている。早川先生46才の頃である。

3. 私自身研究を進めるうえでも、節目節目に先生の力と励ましに頼った。偏極標的を建設し、散乱実験を行なう研究も、当時N研スタッフが在外や他の業務で名古屋大学に居ず、学振の研究生であった私と大学院生中心で実行していた。先生も心配が多かったらしく、パリに行かれた折、SACLAYにおられた政池さんと話され、帰国後私を自宅に呼んで核研での実験の成算について半日ほ

ど質問をされた。その心配がどれ程だったかは、その後超低温設備の完成を祝う言葉、の洒落な文章の中に読むことが出来た。研究をめぐる問題では、その後も心配をかけっぱなしであった。ある時は新しい仕事を提案していただいたが我を通してしまった。CERNとの共同研究開始にあたって心温まる支援を頂いた。

人の偉大さは、その人の年になってはじめて解るのかもしれない。若い学生、スタッフであった自分が、一度として先生から見下すような態度を感じた事はなかった。若い者にも同じ目線で対応しておられた。先生の提案を聞かなかった事があったが、そのことでその後の先生の態度が変わるといったことは一切無かった。いつも、励ましと温かい気持を感じながら過した。先生の人間としての寛容さと温かさ、科学者としての真摯さと大きさを思い出すとき、先生を師として仰ぐことが出来たことに心からの喜びを感じるとともに、若い世代にほんの一部でもよいからそのような姿勢を伝えていければ、と思っている。